

「とやま方言のしくみと歴史」

広島大学大学院教育学研究科 准教授

小西 いずみ 氏

1. とやま方言の地域差と歴史

1-1. 日本語方言全体から見たとやま方言

「とやま方言」は「富山弁」と同じものを指すが、今日はあえて平仮名で表記している。「とやま(富山)」という地名は元々、現在の富山市街地辺りの限られた範囲を指していた。明治になって富山県と富山市ができてから、県全域を指すことも富山市を指すこともあるようになった。また、富山市の範囲も合併でどんどん拡大してきた。私が方言の研究を始めた



約 25 年前は、高岡の方に行くと、高岡の人にとって「富山の言葉」とは「富山市あたりの言葉」のことで、自分の言葉ではないという認識だった。そのような意識は、今も呉西の人にあるかもしれない。そのように「富山」という地名の指す範囲はあいまいで、とらえ方に地域差もあるので、今日は富山県全体の言葉という意味で「とやま方言」と表現することを最初にお断りしておく。

日本の方言は大きく東日本と西日本に分けられる。言葉に限らず、文化全体や自然においても、日本アルプスという境界で大きく東西に分かれるという意識が一般にも持たれている。牛山初男『東西方言の境界』(信教印刷、1969 年)では、東西方言を分ける 5 つの基準を提示している。

一つ目が、動詞の否定形である。例えば「書く」の否定形は、東日本では「カカナイ(書かない)」「カカネー」、西日本では「カカン」となる。富山県では広く「カカン」が用いられ、とやま方言は西日本の形を使っていると言える。

二つ目が、「買う」「歌う」などワ行五段動詞の「～た・～て」形である。東日本では「カッタ(買った)」、西日本では「コータ」となる。富山県でも元々「コータ」が使われているので、この基準から見てもとやま方言は西日本に属する。

三つ目が、形容詞の連用形である。「白い」などの形容詞に「なる」「ない」などを付けた場合、「シロクナル(白くなる)」のように「ク」を付けるのが東日本で、「シローナル」と、「ク」が落ちてしまうのが西日本の言い方である。とやま方言では「ク」が落ちる言い方が多いので、この基準でも西日本方言の形を用いることになる。

四つ目が、「起きる」「見る」など一段動詞の命令形である。「起きる」を、最も乱暴な言い方で人に命令する表現にすると、東日本では「オキロ」というふうに「ロ」で終わるが、西日本では「オキヨ」「オキ(一)」という言い方になる。とやま方言はこの基準では複雑で、簡単にどちらとは言えない。この点は後で述べる。

五つ目が、断定の助動詞である。「とやま方言の講座は今日だ」という場合、東日本では「今日だ」というふうに「ダ」を使うが、西では「ジャ」「ヤ」となる。これについても、

とやま方言がどちらかについては後で述べたい。

この五つの基準によって、それぞれどこに境界線が引けるかを表した地図が牛山氏によって作成されている。それによると、五つの基準のどれもおよそ富山・新潟県境に境界線が引かれている。一方、南の方に行くと、例えば「動詞の否定形」の境界は静岡県内にあるし、「ワ行五段動詞」の境界は愛知・三重県境というふうになずれが生じている。

すでに述べたように、富山県内でも五つの基準の一部に地域差があることが分かっており、牛山の図は正確ではない。ここからはその詳細を見ていきたい。

1-2. とやま方言同士の地域差

富山県の地域差を方言で大きく分けると、呉東と呉西（五箇山を除く）と五箇山の三つに分けられる。さらに、呉東は、旧下新川郡の呉東東部と旧中新川・上新川郡の呉西部に、（五箇山を除く）呉西は、呉西北部（氷見）と呉西南部（氷見以外）に分かれる。この区分にぴったり当てはまる特定の言葉があるわけではないが、生活している皆さんの実感にも合うのではないか。

牛山の五つの基準の一つ目、動詞の否定形については、富山県内全域で「カカン」「ミン」などと、西日本で一般的な形が使われる。

二つ目のワ行五段動詞の「～た・～て形」については、「買う」の場合、「カッタ」ではなく「コータ」がとやま方言では一般的である。ただ最近では、標準語の「買った」という言い方をする人も多くなってきたようだ。呉東の中新川・下新川では、西日本型の「コータ」の一種である「カータ」もある。元々、kau-ta（カウタ）が歴史のどこかで生まれたのだが、au が oo になったのが koo-ta（コータ）、aa になったのが kaa-ta（カータ）である。

三つ目の形容詞の連用形については、例えば「白くなる」が「シロナル」「シローナル」となる西日本型が県内全域で使われている。「シロナル」のように伸ばさない方が普通だが、強調する際に「シローナル」と伸ばして使うこともあり、伸ばすかどうかは地域差というよりも意味の差だと思われる。「高い」など「イ」の前が母音 a の場合、西日本全域では「タコーナル」のように「ナル」が付くと a が o になる場合が多い。しかし、とやま方言では「タコーナル」の他に「タカーナル」というふうに、a のままの言い方もある。中井精一・小西いずみ『富山県方言文法地図』（2009 年、科学研究費報告書）の「高くなる」の図によると（図 1）、呉東でも南部に行くほど「タコーナル・タコナル」と母音が o に変わる形が多く、「タカナル」は呉西でも使われるが五箇山ではほぼ使われていない。

また、とやま方言で非常に特徴的な表現として、「手を高く上げなさい」という場合、「タカ、アゲラレ」とは言いにくく、「タカナト・タカラト アゲラレ」など、「ナト」や「ラト」を付ける言い方が広く使われている。「ラト」が呉西、「ナト」が呉東（特に富山市周辺）で使われることが多い。

四つ目の一段動詞の命令形については、「（早く）起きろ」という場合、最もぞんざいな言い方は「オキマ」となる。また、「オキヤ」のように「ヤ」を付ける言い方もあるが、「明日早く起きや」のように、今ではなく未来のことを言う場合に使われやすい。他に、「オキレマ」のように、「マ」の前に「レ」を付ける言い方もあるが、これは地域が偏っていて、富山市を中心とした呉西部で使われ、その他の地域ではあまり使われない。少し意味合いが違うが、「オキヨ」や「オキロ」という言い方をする人もいる。「オキヨ」の方が多く、「オキロ」は富山市の辺りに偏っている。

とやま方言が全国的に見てどのような特徴を持つかを考える際、富山県は全体的には西

日本方言に属するが、特に呉東では東日本的要素が見られると言われ、その一つが命令形「オキロ」など命令形「～ロ」だとされてきた。ただ、今の四つの形は、「マ」が付くかどうかで性質が分けられるのである。「オキマ (オキーマ)」「オキレマ」には「マ」が付くが、



図 1. とやま方言における「高くなる」の分布

「オキヨ」「オキロ」には「マ」を付けることができない。「オキヨ (一)」「オキロ (一)」は本来、自分が何かしようという「意志」を表す形で、それが動作を促すときにも使われるのである。標準語でも小さな子どもに動作を促すときに「〇〇くん、早く服を着ようね」「きれいに字を書こうね」などと「～(よ)う」が使えるが、大人に対しては使いにくい。とやま方言では、「ハヨ オキヨー・オキロー」など意志を表す「～(ヨ・ロ)一」形が、大人に対する動作の促しでも使える。

また、「オキレ」や「オキロ」という言い方は、富山市周辺で生まれたもののようである。小西らの調査によると、先ほどの「高くなる」と似た地域差があり、呉西と、呉東のうち下新川と南部で「オキマ (オキーマ)」が出てくる。富山市や高岡では「オキレマ」の形が出てくる。「オキレ」の形は富山市周辺で生まれ、富山市から高岡の方に広まったようだ。元々は富山市でも西日本型の「オキー」を使っていたのが、「オキレ」の形を生んだのだろう。「オキロ (一)」という意志の形も、富山市周辺が主で、元々は「ヨ (一)」だったのが「ロ (一)」に変わった新しい形と考えられる。県内でもどちらかといえば呉西は方言に対して保守的で、なぜか富山市の辺りでは独自に新しい変化を起こすようだ。

同じような傾向が五つ目の基準、断定の助動詞においても見られる。日本語全体の歴史の中で、元々「デアリ」「デアル」と言っていたのが、「ル」が落ちて「デア」や「ヂャ」という形になったことは、室町時代末期から江戸時代初めの頃の京都の言葉として記録が残っている。その後、東では「ダ」、西では「ジャ」、京都・大阪では江戸時代末期に「ヤ」という形が生まれたことが分かっている。

富山県内では大きく分けて、「ジャ」「ヤ」の西日本型が呉西でよく使われ、「ダ」は富山

市の辺りでよく使われる。そして室町時代末期、京都で使われていた「デヤ」が、富山の中新川・下新川辺りの高年層でかろうじて今も使われている。実は、私の方言研究はこのテーマからスタートした。調査を始めた約 25 年前は、上市町、立山町などの下新川全域の 60 代以上の方から簡単に聞くことができた。しかし最近では、朝日町で 80 代の方から聞くことはあるものの、ほとんど使われなくなっている。

なお、「ダ」「ジャ」「ヤ」が東西で大きく分かれることは、「日本言語地図」という全国の方言地図にも示されている。新潟・富山、長野・岐阜、そして愛知・三重辺りを境として、東は「ダ」、西は「ジャ」、関西辺りでは「ヤ」という分布となっている。しかし、この地図の中でも、富山に「ダ」があると表記されている。

私が 1995 年から 1997 年にかけて行った調査では、「ヤ」か「ジャ」を主に使う地域は、呉西と水橋辺りから下新川までの沿岸部だった。「ダ」を主に使うが「ヤ」も使う地域は、呉東の特に富山市辺りで、呉東でも南東部になるほど古い言い方の「デヤ」が使われていた（図 2. 小西『富山県方言の文法』ひつじ書房、2016 年から改変）。呉西と呉東で分かれているだけでなく、呉東でも下新川は呉西と似た傾向を持つ場合があることが分かった。

「ダ」「ジャ」「ヤ」「デヤ」のどれを使うかについては、富山県の中に日本全体の縮図があるといえる。そのため、この基準ではとやま方言が西日本的か東日本的かということは明確には言えない。ただ、どちらかといえば県全域の個性は西日本的であり、呉東の一部で少し異なる地域があるという傾向が見られる。

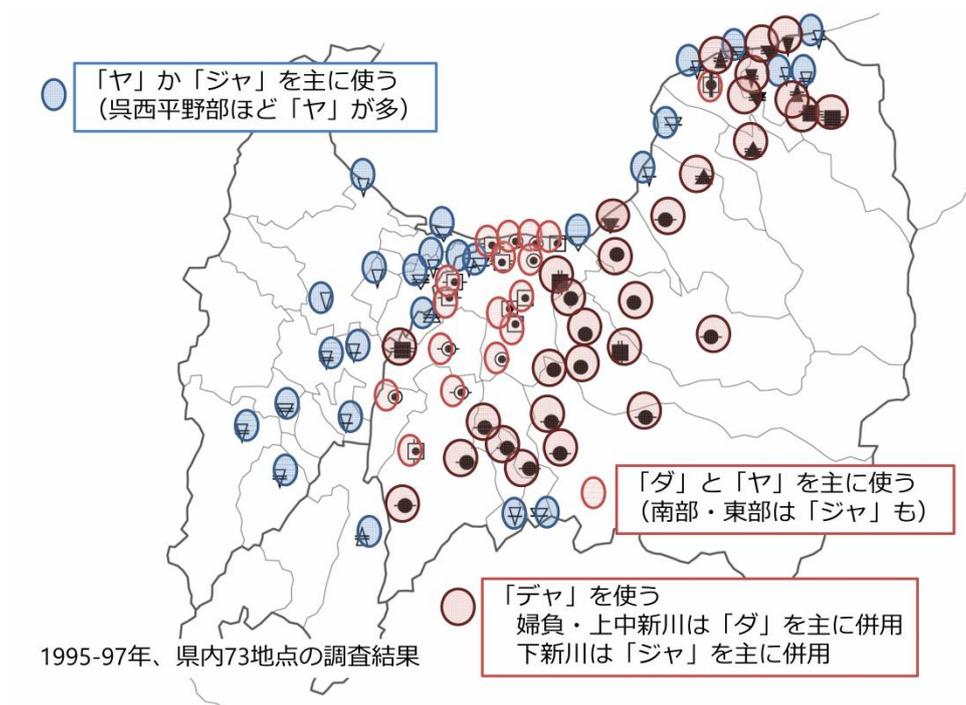


図 2. 断定の助動詞「だ」の分布（小西 2016）

1-3. その他の特徴

とやま方言の特徴としてよく認識されている、人を誘うときの言い方についても見ていきたい。「風呂にでも行こう」というときの勧誘の「行こう」を、「イクマイ」あるいは「イコマイ」や「イカンマイ」と表現する地域が多いと思うが、その他に「マイ」が付かない言い方として「イカンケ」「イコーカ」という勧誘表現もある。

このうち、「マイ」が付く形に絞って見ると、今までの地図と似たような地域差がある。

「イコマイ」が西に偏っており、「イクマイ」も少し西に偏りつつ呉東にも現れている。ただし、富山市街地では「イカンマイ」一色となる。ただ、「イカンマイ」自体は東は黒部まで、西は新湊（射水）、高岡辺りまでで使われている。

これがどういう歴史をたどったのかは推定が難しいが、「イクマイ」が一番古い形だろう。この「マイ」は、標準語にもある否定の意志を表す「決して行くまいと思った」などの「マイ」と同じ語である。富山でも、否定の意志を表す場合にも、「イクマイ」「イコマイ」「イカンマイ」を以前は使っていたが、だんだん使われなくなった。また、「～マイ」は「～しないだろう」という否定の推量でも使われる。しかし、それがだんだん勧誘専用の言い方に変化していった。元々は「イクマイ」だったのが「イコマイ」の形に変わったのが呉西、「イカンマイ」の形に変わったのが富山市辺りだと推測される。小西らの調査では、下新川東部は「イコーカ」「イカンケ」が回答されており、「マイ」自体あまり使わないようだ。

2. 「なーん」に見るとやま方言の仕組み

次に、「なーん」を例に、とやま方言の仕組みについて見ていきたい。

「風邪、なーん治らん」と言った場合の「ナーン」は、「ちっとも」と訳すことができる。文法の用語でいえば、否定の副詞に当たる。主に事物の数量・程度が期待や予測より著しく劣るときに使われる。

しかし、「これはあなたの傘？」という問いに対して「違う」と答える場合、「なーん、太郎のがだわ」あるいは「なーんだ、太郎のがだわ」という言い方をすることもある。この「ナーン」は、「いいえ」と訳すことができる。これは否定の応答詞といえる。

同じ否定の応答詞であっても、「あんたも一緒に行く？」と聞かれたときに「ナーン」は使えるが、「ナーンダ」は使えない。「ナーンダ」はどちらかという、考えてから答えを出した場合に使われる言葉だからである。そのため、頭の中に答えがある場合でなければ使えない。「あんたも一緒に行く？」という問いのように、その場で答えを決めるときには「ナーンダ」を用いることができない。要するに、「ナーンダ」と言えるのは標準語の「違う」に置き換えられる場合であり、「違う」に訳せない場合は「ナーンダ」も使えない。また、「ナーン」の後に、質問の意味を持つ「ケ」を付けて「ナーンケ」、推量の意味を持つ「ダロー・ヤロー」を使って「ナーンダロー・ナーンヤロー」を用いることもできる。

「今日の仕事終わった？」という問いかけに対して、「朝から、なん、忙して進まんが」という答え方もある。この「ナン」は、今までのように置き換えられる言葉がない。あえて当てるならば、「もう」「まあ」のようにはっきりした意味のない言葉で、埋め草のように置く言葉だといえる。この意味のない「ナン」は、伸ばすことが少なく、「ナモ」を用いることもある。元々「ナーン」は否定の意味を持っているので、相手の予想や期待がある場面でそれを打ち消したい場合、「ナン」を挟んでいるようだ。

さらに、共通語の「いやあ」「いやはや」のように、否定と離れた埋め草的な用法が使われる場合もある。問いとして明確に聞かれているわけではないが、前提となっていることに対して期待から外れている意味合いを添える効果があるのではないかと考えている。

3. 最近の研究活動

最後に、私が最近インターネットで朝日町笹川の方言を発信している活動について紹介する。小西の名前で検索すると、広島大学内の「いづくに 小西いづみによる日本語と日本語方言の情報庫」のページ (<https://home.hiroshima-u.ac.jp/ikonishi/sasagawa/sasagawa.html>)

にたどり着くことができる。

例えば「私」を表す言葉として、富山では「オラ」、市街地に行くと「ワシ」が男女問わず使われてきた。一方、笹川では、「オラ」は限られた場合にしか使われず、「オン」が用いられている。どうも笹川では「オラ」は「私が」「私は」の場合にしか使われていないようだ。元々「オレワ（俺は）」だったものが「オラ」に変わったのだろう。また、「オラ（ラが高い）」とは違う「オラ（オが高い）」という言葉もある。これは、「私たち」という複数形の意味を持っている。

その他に、相手を指す言葉に「あなた」があるが、笹川では丁寧な言葉として「オマエサ」が使われ、ぞんざいな言い方では「われ、何しとるんじゃ」の「ワレ」に由来する言い方で「ワ」「ヴァ」が使われ、「わ、何しとらよ」などという言い方もある。

「長男」「次男」を表す言葉は県内でも少しずつ地域差があるが、笹川では長男を「アンボ」といい、次男を「オジ」という。

やはり方言は話し言葉なので、文字で書くだけでなく、聞いて分かるように記録しておきたい。そう考えて最近では、協力者に許可を得て、録音し、インターネット上で公開する活動をしている。笹川の記録については、今挙げたもの以外にも掲載している。今後も更新していく予定なので、皆さんにもご覧いただければ幸いである。